

# 無名譚

4 北朝鮮帰国事業・日本人妻 平島筆子（二〇〇三年取材時六十四歳）

## 帰国船のアイドル（上）

構成●七尾和晃（フンフィクション作家）

一九五九（昭和三十四）年、日本在住の朝鮮籍・韓国籍の人々の帰国事業が始まった。最初の帰国船は、十二月十四日、二百三十八世帯、九百七十五人を乗せて新潟港から出航した。平島筆子は当時二十一歳。帰国事業における最年少の日本人妻だった。二〇〇二年北朝鮮を脱北し、翌〇三年日本に帰国するも、〇五年、再び北朝鮮に渡った。現在の消息は不明――。

出発は東京の品川駅でした。朝鮮総連（在日本朝鮮人総連合会）から品川駅に集合するように連絡を受け、駅には私のような日本人妻やその家族がいっぱい集まっています、たいへんな人ばかりでした。新潟から出る

ついていかなければいけない、という考えでした。

結局、あるとき品川駅で見た両親と妹の姿が、今生の別れになってしまいました。待ち受けているもの、思いをめぐらせるには、若すぎて、無知すぎたのかも、しない。

### 意思確認

新潟の日赤センターで、乗船前最後の意思確認がありました。部屋に通されると、「本当に北朝鮮に行くのか」と聞かれました。私は何も答えませんでした。主人が、私が口を開く前に、手をぎゅっと握ったからです。「何も言わなくていい」――そんな沈黙のメッセージが、固く握られた掌を通して伝わってきました。日赤センターには、出航前の数日間滞在しました。日本人妻やその家族は講堂のような大部屋で寝起きをともにしました。品川を発ったのが十二月十二日。帰国船第一便の出発は十四日でした。

帰国船は二隻が停泊していて、どちらにもロシア語で船名が書かれています。棧橋から船に乗るとロシア人の船員がいましたので、用意された帰国船はソ連

帰国第一船に間に合うように、品川駅には貸し切りの特別列車が停まっています。

駅には私の両親と妹が見送りに来ていましたが、そのときもまだ家族は私の渡航には反対でした。妹のキヨ子が私の主人の袖をつかみ、「姉さんを連れて行かないで」と泣いて懇願していました。妹はセーラー服姿で、そのセーラー服は私が働いて買ってあげたものでした。

列車が品川駅を発つ瞬間は、両親や妹の反対を押し切ってまで渡航しようとする自分自身がとても恨めしかった。でもそのときは、三年経てば日本に戻れるし、いずれ日本と北朝鮮を自由に行ったり来たりできるよ、うになると信じていたので、とにかく嫁として主人に

船だったのでしよう。

船に乗り込むと、日本の外務省の人たちがいて、順番に確認をしていました。私の渡航の決意が揺らぐのを恐れたのか、主人はやはり私が口を開こうとするのを遮っていました。日本人妻と夫らはテーブルの前の椅子に座らされていました。私は椅子には座らずに立ったまま最終の意思確認を終えました。

その段階でも迷っている日本人妻が大勢いたようです。主人についていくという強い決心があった自分です。品川を出るときの両親の涙や、妹のキヨ子の姿を思い浮かべると、後ろめたさや申し訳なさを押し潰されそうでした。

両親に渡航を知らせたのは、渡航する一カ月前でした。朝鮮人になるといふのか――父親はそんな思いだったようです。両親の世代は、まだ朝鮮人に対する差別感が残っていたかもしれない。「そんなところに嫁に行かせるためにお前を育てたんじゃない」と言われたときはとても辛かった。でも、両親の反対を振り切るほどに、主人の私に対する愛情は情熱的でした。出会った当初はあまり気乗りせず、何度も何度も逃げ回った末に受け入れた求婚でしたが、頼もしさ